

離婚家庭の子どもの目に映る「祖父母との関わり」

—祖父母による養育支援の実情に注目して—

北九州市立大学大学院

社会システム研究科地域コミュニティ専攻

2023M30007

劉 志穎

論文要旨

本研究は、日本における離婚家庭の子どもの祖父母との関係性をどのように経験し、それが子どもの人生にどのような影響を与えるのかを、離婚家庭で育った若者へのインタビューを通して明らかにすることを目的とした家族社会学の研究である。

日本における孫と祖父母の関係性は「非干渉原則」を基本としながらも、社会経済的变化とともに多様化している。そうした変化を背景としながらも、特に離婚家庭において、祖父母は養育サポートの提供者となると同時に、孫にとって親の離婚に伴い生じた悩みや不安を理解し支える重要な存在となりえるだろう。しかし、従来の研究は主に離婚後の親子関係や経済状況に焦点を当ててきた一方で、祖父母と孫の関係性に着目し、子どもの視点かその影響を深く掘り下げる研究は十分に行われてこなかった。

そこで本研究は、祖父母を単純な「補助的な支援者」としてよりもむしろ離婚過程において直接的・間接的にも子の養育に一定の役割を果たす「孫と向き合う存在」として捉え直し、離婚家庭の子どもの祖父母との関わりの体験を手がかりに、祖父母による支

援の実態、子ども側から認識した祖父母との関係のあり方を明らかにすることを試みた。インタビュー調査は、親の離婚を経験した20代前半の若者6名を対象に実施した。その結果、日本の離婚家庭における孫と祖父母の関係性は親の離婚という単一の事象のみならず、経済状況、親子関係、祖父母自身の資源や意欲、そして孫との物理的な距離と心理的な距離など、複合的な要因によって離婚家庭における孫と祖父母との関係が形成されていることがわかった。

まず、祖父母による支援の実態は、離婚家庭の経済状況や親の就労状況によって大きく異なることが明らかになった。例えば親の離婚によって経済的な困難に直面した家庭では、祖父母が養育者として日常生活の中で孫育てを担う一方、離婚が家庭の経済状況に大きな影響を与えなかった場合は、祖父母の関与が比較的に限定されることになり、離婚家庭に対する「特別な支援」として位置づけられないことも明らかになった。

また、孫と祖父母との関わりについては、あくまでも親を介した「三世代の繋がり」で間接的に構築されているという特徴から、「親（祖父母の子）と祖父母」との関係、すなわち親子関係にも一定の影響を受けていることも示唆された。親が祖父母との関係を良好に保ちながら積極的なコミュニケーションがとれていた場合、孫も祖父母との結びつきを自然に育むことが可能となっていた。しかし、親が祖父母との関係を断絶したり、否定的に捉えたりすると、孫と祖父母の接触や信頼関係の構築は著しく困難となる傾向が見られた。

さらに、祖父母との物理的な距離が近いことが心理的な距離を必ずしも縮めるわけではないことも明らかとなった。祖父母が孫から物理的に遠ざかることで感情的なつながりが強化される場合もあるが、家庭内のストレスが心理的な距離を拡大させ、祖父母との関係構築を妨げる場合もあった。

本研究を通じて、離婚家庭における孫と祖父母との関係はときには養育者、またあるときには相談相手、そして親子関係の葛藤を避けるうえでの避難先として機能するといった単なる養育関係に留まることのない多面的な役割を果たしていることが明らかとなった。このような祖父母の存在は、家族形態の多様化と核家族化が進行している現代において、改めて再評価されるべき重要な資源であろう。家族領域における制度的変化がますます加速している現代社会において、本研究は、祖父母という存在をめぐる研究は、その変化に応答しうる実証的で理論的な知見の蓄積が一層必要とされることを改めて検証する結果となった。